

別表五の二(一)付表一

「連結個別利益積立金額及び連結個別資本金等の額の計算に関する明細書」

1 連結個別利益積立金額の計算に関する明細書

(1) この明細書の用途

この明細書は、法第2条第18号の3(定義)及び令第9条の3(連結個別利益積立金額)に規定する連結個別利益積立金額を計算するために使用します。

(2) 各欄の記載要領

欄	記載要領	注意事項
「法人名」	連結親法人の法人名を記載するとともに、括弧の中に連結個別利益積立金額の計算を行う連結法人の法人名を記載します。	
「区分」の「積立金2」以下の空欄	<p>(1) 「利益準備金1」以外の連結個別利益積立金額(税務上の否認金額のうち留保した金額を含みます。)について、その名称を記載します。</p> <p>(2) 連結親法人が、自己の連結個別利益積立金額の計算を行う場合には、次によります。</p> <p>① 各連結法人の当期に係る連結法人税個別帰属支払額(法第81条の18第1項(連結法人税の個別帰属額の計算))の規定により計算される各連結法人が各連結事業年度の連結所得に対する法人税の負担額として帰せられる金額を支払うこととなる場合のその支払うこととなる金額をいいます。以下同じです。)及び連結地方法人税個別帰属支払額(地方法第15条第1項(連結法人の地方法人税の個別帰属額の計算))の規定により計算される各連結法人が各連結事業年度の地方法人税の負担額として帰せられる金額を支払うこととなる場合のその支払うこととなる金額をいいます。以下同じです。)を受け取ることとなる場合において、空欄に「未収連結法人税個別帰属支払額及び未収連結地方法人税個別帰属支払額」と記載し、その受け取ることとなる金額(各連結法人の「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」の「当期の増減」の「増③」の「中間」及び「確定」の金額のうち連結法人税個別帰属支払額及び連結地方法人税個別帰属支払額を合計した金額)を「当期の増減」の「増③」に△印を付さずに記載します。</p> <p>② 各連結法人の当期に係る連結法人税個別帰属受取額(法第81条の18第1項の規定により計算される各連結法人が各連結事業年</p>	左記(2)①及び②の「各連結法人」には、連結親法人が含まれます。

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>度の連結所得に対する法人税の減少額として帰せられる金額を受け取ることとなる場合のその受け取ることとなる金額をいいます。以下同じです。)及び連結地方法人税個別帰属受取額(地方法第15条第1項の規定により計算される各連結法人が各連結事業年度の地方法人税の減少額として帰せられる金額を受け取ることとなる場合のその受け取ることとなる金額をいいます。以下同じです。)を支払うこととなる場合において、空欄に「未払連結法人税個別帰属受取額及び未払連結地方法人税個別帰属受取額」と記載し、その支払うこととなる金額(各連結法人の「21」の「当期の増減」の「増③」の「中間」及び「確定」の金額のうち連結法人税個別帰属受取額及び連結地方法人税個別帰属受取額を合計した金額)を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します。</p> <p>③ 連結親法人の別表五の二(□)付表の「確定4」の「期末現在未納税額⑥」の本書の金額につき、空欄に「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載し、その金額を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します(本書に△印の付された金額がある場合(すなわち、連結法人税及び連結地方法人税の中間分に未納税額がある場合)には、△印を付さずに記載します。)</p> <p>なお、同付表の「確定4」の「期末現在未納税額⑥」に外書(△印)の金額がある場合(すなわち、中間納付額の還付金がある場合)には、空欄に「未収還付連結法人税」等と記載の上、「当期の増減」の「増③」にその金額(△印は付けません。)を記載します。</p>	
<p>「期首現在連結個別利益積立金額①」</p>	<p>原則として、前期分のこの明細書の「差引翌期首現在連結個別利益積立金額④」の各欄の金額(更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額)を移記します。</p> <p>なお、前期が単体法人である連結法人にあっては、前期の別表五(一)の「差引翌期首現在利益積立金額④」の各欄の金額(更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額)をこの明細書の該当する欄に記載します。</p>	<p>この申告が連結中間申告であるときは、この欄だけを記載し、「当期の増減」及び「差引翌期首現在連結個別利益積立金額④」の記載は必要ありません。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「当期の増減」</p>	<p>原則として、「減②」には別表四の二付表の「減算」の「留保②」の金額を、「増③」には同付表の「加算」の「留保②」の金額を、その内容に応じて記載します。この場合に同付表の「減算」に記載した「仮払税金（仮払連結法人税、仮払連結地方法人税、仮払法人税、仮払地方法人税、仮払道府県民税又は仮払市町村民税）」については「増③」に△印を付けて記載します。</p> <p>なお、次のような場合には、同付表と関係なく次によります。</p> <p>(1) 納税充当金を取り崩して、連結法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、連結地方法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、地方法人税（利子税及び延滞税を除きます。）、道府県民税又は市町村民税の額を納付した場合には、「納税充当金20」の「減②」にその合計額を記載するとともに、連結法人税及び連結地方法人税にあつては「3」から「17」までの空欄のいずれかに「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載した欄の「減②」にその金額を△印を付して、その他のものにあつては「未納法人税及び未納地方法人税22」、「未納道府県民税23」又は「未納市町村民税24」の「減②」にこれらの税額をそれぞれ記載します。</p> <p>(2) 当期の中間納付額として納付すべき連結法人税、連結地方法人税、道府県民税又は市町村民税の額がある場合には、納付の有無に関係なく、別表五の二(二)付表の「中間3」の「当期発生税額②」の金額を△印を付して「3」から「17」までのいずれかの空欄に「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載した欄の「増③」に、同付表の「中間8」及び「中間13」の「当期発生税額②」の金額を「未納道府県民税23」及び「未納市町村民税24」の「増③」の「中間」にそれぞれ記載します。</p> <p>(3) 中間配当積立金等を取り崩して剰余金の配当（資本剰余金の額の減少に伴うものを除きます。以下同じです。）若しくは利益の配当又はいわゆる中間配当（資本剰余金の額の減少に伴うものを除きます。以下同じです。）をした場合には、その積立金の取崩額を「減②」に記載します。</p> <p>なお、この金額は「繰越損益金18」の「増③」の金額に含まれることとなります。また、この場合に会社法第445条第4項の規定により積み立てた剰余金の配当に係る利益準備金の額は、「利益準備金1」の「増③」に記載しま</p>	<p>(1) 別表四の二付表の「加算」の「損金経理をした法人税及び地方法人税（附帯税を除く。）14」の「留保②」の金額のうち連結法人税及び連結地方法人税（未納のものを除きます。）にあつては△印を付して「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」と記載した欄の「減②」に、法人税及び地方法人税にあつては「未納法人税及び未納地方法人税22」の「減②」に記載します。</p> <p>また、同付表の「損金経理をした連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額15」の「留保②」の金額（未払のものを除きます。）については「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」の「減②」に△印を付して、同付表の「損金経理をした道府県民税及び市町村民税17」の「留保②」の金額については「未納道府県民税23」及び「未納市町村民税24」の「減②」にそれぞれ記載します。</p> <p>なお、連結法人税及び連結地方法人税並びに連結法人税個別帰属額及び連結地方法人税個別帰属額の当期発生額を損金の額又は益金の額に算入し、「未払金」又は「未収入金」等により経理した場合には、この明細書の「3」から「17」までの空欄のいずれかに「未払金」又は「未収入金」等と記載の上、その欄の「増③」にその経理した金額を記載し</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>す。</p> <p>(4) 平成22年10月1日以後に適格合併に該当しない合併により完全支配関係がある被合併法人から移転を受けた譲渡損益調整資産がある場合には、令第9条の2第1項第1号ヲ(連結利益積立金額)に規定する金額を「減②」又は「増③」に記載します。</p> <p>(5) 適格合併、適格分割型分割又は適格現物分配により被合併法人、分割法人又は現物分配法人から移転等を受けた資産等がある場合には、令第9条第1項第2号から第4号まで(利益積立金額)の規定に準じて計算した金額を「増③」に記載します。</p> <p>(6) 法人が有する完全支配関係がある法人の株式等について寄附修正事由が生ずる場合には、「区分」に「〇〇株式(寄附修正)」などと表示した上で、令第9条第1項第7号の規定に準じて計算した金額を「減②」又は「増③」に記載します。</p> <p>(7) 適格分割型分割により分割承継法人に移転をした資産等がある場合には、令第9条第1項第10号の規定に準じて計算した金額を「減②」に記載します。</p> <p>(8) 非適格株式分配により現物分配法人の株主等に交付した資産等がある場合には、令第9条第1項第11号の規定に準じて計算した金額を「減②」に記載します。</p> <p>(9) 資本の払戻し等及び出資等減少分配並びに自己株式の取得等により減算される連結個別利益積立金額がある場合には、令第9条第1項第12号から第14号までに規定する金額の合計額を「減②」に記載します。</p> <p>(10) 減価償却資産につき減価償却超過額(法第31条第4項(減価償却資産の償却費の計算及びその償却の方法)に規定する損金の額に算入されなかった金額をいいます。)がある場合において、その減価償却資産につき令第48条第5項第3号ハ(減価償却資産の償却の方法)に規定する評価損が生じたときには、その評価損はまずその減価償却超過額からなるものとして、その評価損の金額と減価償却超過額の金額(その減価償却資産に係る前期から繰り越された減価償却超過額と当期の償却超過額との合計額)とのいずれか少ない金額を、「区分」に「減価償却超過額」と記載した欄の「減②」に記載するとともに、その減価償却資産に係る評価損の金額を「減②」に記載した同欄の上段に△印を付して記載します。</p>	<p>ます(未収入金に相当する金額は△印を付します。)</p> <p>(2) 当期中に剰余金の処分により積み立てた準備金等の金額で損金の額に算入するものについては、その積立額を「当期の増減」の「増③」に記載し、別表四の二付表において「減算」の「11」又は「50」から「52」までの各欄に記載した金額を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します。</p> <p>また、当期末後、当期の決算の確定の日までに剰余金の処分により積み立てた準備金等の金額で損金の額に算入するものについては、別表四の二付表において「減算」の「11」又は「50」から「52」までの各欄に記載した金額を「当期の増減」の「増③」に△印を付して記載します(その積立額は、翌期において「当期の増減」の「増③」に記載します。)</p> <p>(3) 剰余金の配当、利益の配当若しくは中間配当又はこれらに係る利益準備金の積立てのために取り崩した繰越利益金の額は、「繰越損益金18」の「減②」の金額に含まれることとなります。</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
<p>「繰越損益金18」</p>	<p>「期首現在連結個別利益積立金額①」には、利益剰余金の当期首残高(マイナスの場合は△印を付してください。)を記載し、同一金額を「減②」に記載することによって「期首現在連結個別利益積立金額①」を0とし、改めて利益剰余金の当期末残高を「当期の増減」の「増③」に記載します。「増③」は、当期以前の各事業年度又は各連結事業年度(法第64条の4第1項((公益法人等が普通法人等に移行する場合の所得の金額の計算))又は平成31年改正前の法(以下「平成31年旧法」といいます。)第64条の4第1項((公益法人等が普通法人に移行する場合の所得の金額の計算))の規定の適用を受けた事業年度前の各事業年度又は各連結事業年度を除きます。)において次に掲げる事由が生じた場合には、それぞれ次に定める金額を同欄の上段に内書として記載します。この場合、「差引合計額25」は、その内書として記載した金額を「繰越損益金18」から減算して計算します。</p> <p>(1) 公益法人等のその収益事業以外の事業に属していた資産及び負債がその収益事業に属する資産及び負債となったこと その資産の価額としてその収益事業に関する帳簿に記載された金額からその負債の価額としてその収益事業に関する帳簿に記載された金額を減算した金額</p> <p>(2) 公益法人等が普通法人又は協同組合等に該当することとなったこと(法第64条の4第1項又は平成31年旧法第64条の4第1項の規定の適用があったものを除きます。) その該当することとなった時(2)において「移行時」といいます。)において有する資産(その収益事業以外の事業に属していた資産に限ります。)の価額としてその移行時においてその帳簿に記載されていた金額からその移行時において有する負債(その収益事業以外の事業に属していた負債に限ります。)の価額としてその移行時においてその帳簿に記載されていた金額を減算した金額</p> <p>(3) その法人を合併法人とし、公益法人等を被合併法人とする適格合併(その法人がその適格合併の時において資本又は出資を有する法人であった場合には、その適格合併に係る被合併法人の全てが資本又は出資を有しない法人であったものに限ります。)により資産及び負債(その法人がその適格合併の時において公益法人等であった場合には、その収益事業に属する資産及び負債となったもの)に限りま</p>	

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
	<p>す。)の引継ぎを受けたこと(法第64条の4第2項又は平成31年旧法第64条の4第2項の規定の適用があったものを除きます。)その資産の令第123条の3第3項(適格合併及び適格分割型分割における合併法人等の資産及び負債の引継価額等)に規定する帳簿価額からその負債の同項に規定する帳簿価額及びその適格合併に係る令第9条第1項第2号に掲げる金額の合計額を減算した金額</p> <p>(4) 法第64条の4第1項若しくは第2項若しくは平成31年旧法第64条の4第1項若しくは第2項の規定の適用があったこと(令第131条の5第1項第3号又は第4号(累積所得金額から控除する金額等の計算))に掲げる場合に該当するものに限ります。)又はその法人を合併法人とする合併につき令第131条の5第8項の規定の適用があったこと 当期末における同条第7項に規定する調整公益目的財産残額に相当する金額</p> <p>(5) 法第64条の4第1項若しくは平成31年旧法第64条の4第1項の規定の適用があったこと(令第131条の5第1項第5号に掲げる場合に該当するものに限ります。)又はその法人を合併法人とする合併につき令第131条の5第13項の規定の適用があったこと 当期末における同条第10項に規定する救急医療等確保事業用資産取得未済残額に相当する金額</p>	
<p>「未払連結法人税個別帰属額及び未払連結地方法人税個別帰属額21」</p>	<p>各連結法人の当期に係る連結法人税個別帰属支払額又は連結法人税個別帰属受取額及び連結地方法人税個別帰属支払額又は連結地方法人税個別帰属受取額を「当期の増減」の「増③」の「確定」に記載します(連結法人税個別帰属支払額及び連結地方法人税個別帰属支払額については△印を付して記載します。)</p>	<p>連結法人税及び連結地方法人税の中間納付に係るものがある場合には、「当期の増減」の「増③」の「中間」に記載します。</p>
<p>「未納法人税及び未納地方法人税(附帯税を除く。)22」</p>	<p>所得に対する法人税(連結納税の承認の取消しに係る特別控除取戻税額、リース特別控除取戻税額、使途秘匿金の支出の額に対する法人税、土地譲渡利益金額に対する法人税及び連結特定同族会社の連結留保金額に対する法人税を含みます。)の本税及び地方法人税の本税の額を記載します。</p>	
<p>「未納道府県民税23」及び「未納市町村民税24」の「当期の増減」の「増③」の「確定」の各欄</p>	<p>別表五の二(二)付表の道府県民税又は市町村民税の額の「期末現在未納税額⑥」の「9」及び「14」の本書の金額をそれぞれ記載します。</p>	<p>別表五の二(二)付表の「期末現在未納税額⑥」の「9」及び「14」に外書(△印)の金額がある場合(すなわち、中間納付額の還付金がある場合)には、「3」から「17」までの空欄に「未</p>

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
		収還付道府県民税」等と記載の上、「当期の増減」の「増③」にその金額(△印は付けません。)を記載します。

(注) この明細書は、連結親法人を除き、通常の場合には次の算式により検算ができます(連結親法人にあっては、この明細書に記載する「未収連結法人税個別帰属支払額及び未収連結地方法人税個別帰属支払額」から「未払連結法人税個別帰属受取額及び未払連結地方法人税個別帰属受取額」を減算した額と「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」との間に差額がある場合には、その差額に相当する金額が検算式と不符号となります。)

なお、当期中の適格合併、適格分割型分割又は適格現物分配により被合併法人、分割法人又は現物分配法人から移転等を受けた資産等、法人が有する完全支配関係がある法人の株式等について寄附修正事由が生ずる場合及び適格分割型分割により分割承継法人に移転をした資産等がある場合には、これらの金額が検算式と不符号となります。

$$\begin{aligned}
 & \boxed{\text{差引合計額「25」①}} + \boxed{\text{別表四の二付表留保総計「55」②}} \\
 & \quad - \boxed{\text{中間分、確定分連結法人税個別帰属額・連結地方法人税個別帰属額・}} \\
 & \quad \quad \quad \text{法人税・地方法人税・県市民税の合計額}} \\
 = & \boxed{\text{差引翌期首現在連結個別利益積立金額「25」④}}
 \end{aligned}$$

(3) 根拠条文

法二十八の三、令九の三

2 連結個別資本金等の額の計算に関する明細書

(1) この明細書の用途

この明細書は、各連結法人の法第2条第17号の2（定義）及び令第8条の2（連結個別資本金等の額）に規定する連結個別資本金等の額を計算するために使用します。

発行済株式又は出資のうちに2以上の種類の株式又は出資がある場合には、別表五（一）付表の記載が必要となります。

(2) 各欄の記載要領

欄	記 載 要 領	注 意 事 項
「区分」の「28」及び「29」の空欄	「資本金又は出資金26」及び「資本準備金27」以外の連結個別資本金等の額について、その名称を記載します。	
「期首現在連結個別資本金等の額①」	<p>前期分のこの明細書の「差引翌期首現在連結個別資本金等の額④」の各欄の金額（更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額）を移記します。</p> <p>なお、前期が単体法人である連結法人にあっては、前期又は分割前事業年度の別表五（一）の「差引翌期首現在資本金等の額④」の各欄の金額（更正又は決定があった場合には、その更正又は決定に基づいて調整した後の金額）をこの明細書の該当する欄に記載します。</p>	この申告が中間申告であるときは、この欄だけを記載し、「当期の増減」及び「差引翌期首現在連結個別資本金等の額④」の記載は必要ありません。
「当期の増減」	<p>(1) 令第8条第1項第1号から第12号まで（資本金等の額）の規定に準じて計算した金額を「資本準備金27」から「29」までの各欄の「増③」に記載します。</p> <p>(2) 令第8条第1項第13号から第18号まで及び第20号から第22号までの規定に準じて計算した金額を△印を付して「資本準備金27」から「29」までの各欄の「増③」に記載します。</p>	

(3) 根拠条文

法27の二、令8の2